



# 広域版

No. 3

昭和 51 年 3 月 10 日 発行

発 行

坂町  
富町  
川町  
七町  
八町  
白町  
東町  
印刷  
祝加辺宗  
百津川  
白川  
印刷  
町  
町  
町  
町  
町  
町  
村  
関印刷

## 事故防止の 願いをこめて

交通安全の掛け声もむなしく、毎日繰り返される交通事故。

私たちは今、お互いに守らなければならぬことは、確実に実行して、交通事故のない明るい郷土にしたいのです。

(家庭訪問指導も地道な)  
活動の一つ——坂祝町



# 4人のうち に死者集中

交通事  
追つて



## あつ、あぶない 一瞬トラックの 横腹へ

「あつ、あぶない。対向車がぶつかってくる。」大型トラックの運転手は、無我夢中でブレーキに足を……。

朝もや立ち込める夏の早朝、昭和五十年七月二十六日、国道四一号線七宗町内の路上で、金属音とタイヤのきしみを残して、一瞬にして四人の命を飛散させたすさまじい交通事故が起った。

普通乗用自動車が対進てくる大型トラックに突っ込んで行つたのだ。ボンネットから屋根にかけてたたきつぶされ、ほんの数秒前までは、あの美しいスタイルを誇っていた文明の利器も、一瞬のうちに押しつぶされて、醜い鉄くずと化し、エンジンをさらけ出していた。

壊れたスピードメーターの針は六十キロ札を指し、血にまみれた運転手の腕時計は、午前五時七分を指し、事故のものすごさを物語ついていた。

大型トラックの運転手は、突然斜めに走つて体当たりしてきた自動車に対し、ブレーキを踏む余裕もなく、荷物を満載している重いトラックのハンドルは、切つて避けるすべもなかつた。

彼は、激突のショックを五体に受けとめて、足元にくい込んでいる乗用車のざんがいに思わず目をそむけた。

いつしょに出発した彼らの知人や同僚を乗せたマイクロバスは、白川を過ぎても追走してくる気配

のないことに気づいた。  
この中には肉親も乗つていて、不吉な予感がしだいに身を包みはじめていた。  
“もしや”的気持を押えて、今きた道をもどつてみると、中麻生の事故現場には数十台の車の渋滞、彼ら四人の姿も車もなかつた。  
それもそのはず、鉄くずに埋まつた彼らの姿が、もう帰らぬ人となつて待つていたのだ。みんなはあまりの出来事に絶句して、放心状態の中で、救出作業を考える余裕もなく、その場に立ちつくしかつて待つていたのだ。

やがて、太田方面からパトカーと救急車のサイレンが聞こえはじめた……。

Aさんは、近所での信望も厚く愛妻との間には、二十四歳と二十一歳になる男の子があり、人もうらやむ幸福な家庭でした。

ここ、神奈川県横須賀市は、港の見える高台の静かな高級住宅街です。

会社員Aさん（48歳）と、海上自衛官Bさん（46歳）は、隣りどうしで長年の親しいつき合いの間、いつものように午後五時半ごろ勤めを終え帰宅、その足で町内会の

## 横須賀から高山 の朝市見物に

た。

Aさんは、近所での信望も厚く愛妻との間には、二十四歳と二十一歳になる男の子があり、人もうらやむ幸福な家庭でした。

数日前、二人は近所の人たちや同僚数人を誘い、飛騨高山の朝市見物のドライブに出かける約束をしていました。

出発は七月二十五日、Aさんはいつものように午後五時半ごろ勤めを終え帰宅、その足で町内会の

# 睡魔が奪った 国道41号線

心うきうきと出発したのです。さすがに深夜は通る車も少なくて、快適に運転を続けることがで

か、外に出て冷たい夜風に吹かれているうちに、それもいつしか消えました。

この夜は、祭りの精算と反省会があり、夕食を兼ねた小宴が開かれました。が、運転を控えたAさんは、一滴の酒も口にしませんでした。

帰宅は十時、旅行の準備を終えた奥さんを伴って、Bさんの家に回ると、すでに仕度を整えて数人の仲間とAさんの到着を待っていました。

さあ出発、Aさんが自分の車のハンドルを握り、隣りに奥さん、マイクロバスに乗り込み、深夜の東名高速道路を飛驒高山めざして

集まりへ出かけました。

午前〇時半二台の車は大井松田のサービスエリアに入りました。車を降り、「うん」と背伸びをしたAさんは、まだ眠気は感じません。あたりには明りも見えず、夜のとばりの中で静かに眠りについています。二十分ほど休憩の後出発。

午前二時半、車は浜名湖サービスエリアに入りました。

同乗の奥さんとBさん夫婦は、すでに軽い寝息を立てていました。

## あのとき運転を替わつていたら

きました。車の前方に見えるのは一緒に出発したマイクロバスのテールランプだけ、車中は楽しい世間話に花が咲き、心はすでに目的地へと飛んでいました。

高速道路を出て、国道四一号線に入り、午前四時半、犬山のガソリンスタンドに立ち寄りました。東の空もしだいに明るくなり、マイクロバスから降りた仲間のひとりが、Aさんに「夜通し運転してきたから疲れたろう。マイクロバスも運転を交替したから君もそろそろ替つたらどうだ。」「いや、ひと休みしたら、眠気もさりがありました。まだいくらでも運転できるよ。だいじょうぶ、だいじょうぶ。さあ出発だ。」こんなやりとりがありました。

しかし、この時、長距離ドライブの疲れと恐ろしい睡魔は、四人の命をのみこまんと、暗黒の大きさがあつた。Aさんは、まだ眠気は感じません。あたりには明りも見えず、夜のとばりの中で静かに眠りについています。二十分ほど休憩の後出発。



昨年2月、白川町坂ノ東で起った事故はスピードの出し過ぎで2人が即死

## 無理な計画と聞けなかつた忠告

以上のような経過から、單にこの事故は、居眠り運転のみの原因で片付けてよいものでしょうか。予測されることは、途中の休憩において運転を交替しなかつたこと、長距離運転の計画に無理があったことなどあげられます。Aさんのように、十年以上もの運転歴を持つベテランなら、途中の小休止だけで長距離を走ることが、いかに危険であるかを十分承知していましたはずです。酒席での飲酒を断わるだけの勇気をもつていいながら、なぜ運転を交替できなかつたか。疑問は残ります。

疲労運転は、飲酒運転と同じ危険をはらんでいる。飲酒運転は社会悪として、地域ぐるみの防止が叫ばれているにもかかわらず、疲労運転は、とかく見過ごされがちです。

自分で注意することはもちろんもっと周囲の強い忠告があつたなら、未然に防ぐことができた事故ではなかつたでしょうか。

この事故を取材して、せい惨な現場の状況を生々しく描写しましたが、少しの注意、周囲の忠告がいかに大切であるかを、身をもつて感じ、明日は我が身の保障は、だれにできましょうか。

向車に吸い寄せられたかのよう、走る凶器と化した車は、センターラインを越え、二組の夫婦の悲惨な運命を乗せて……。いつたい何が、なぜ、どうしてこんな事になってしまったのでしょうか。犠牲者の所在地へ、その後の家族の状況を問い合わせたところ「落ちついた普通の生活をしている」との返事であつたため、しかと確かめようもありませんが、生活は相手を傷つけたり、死亡させた場合、その補償は家族が償わなければなりません。現在、働き盛りの人が死亡させた場合、三千万円の補償がいるといわれます。

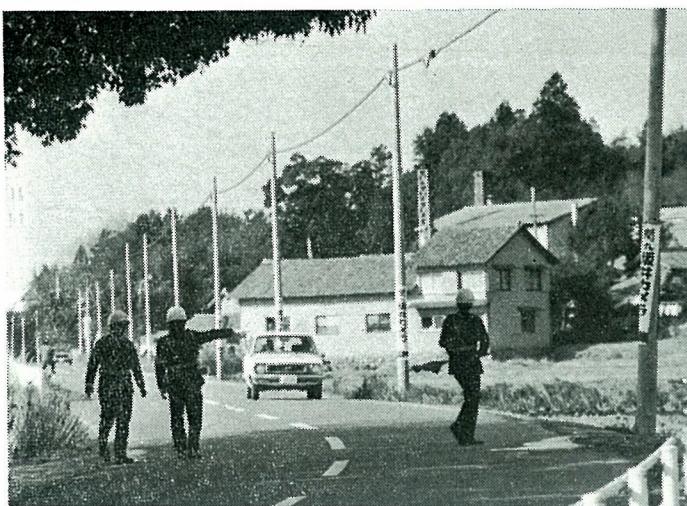
犠牲者の所在地へ、その後の家族の状況を問い合わせたところ「落ちついた普通の生活をしている」との返事であつたため、しかと確かめようもありませんが、生活は別としても、心に残された深い傷跡は消えるものではないでしょう。残された子どもたちの将来は決して明るいものでないことは想像できます。

今や、全国で年に六十六万人もの人が、車により傷つけられたり死亡しています。暴走、飲酒、無免許といった悪質なものから、交通ルール違反まで、原因はいろいろあるにしても、そこには必ず犠牲者がいます。

ある故を

# 悲惨な犠牲者は今日も

## 加茂署管内　昨年は悲しい記録県下――



速度制限をオーバーして次々に捕まる違反車



違反者には反則キップと厳しいおきゅうが……。

昨年一年間の加茂署管内における交通事故発生状況がまとまりました。これによると、例年に比較して特に死亡事故の増加が目立ち、二十二人の命が失われました。おととしの十人を倍以上も上回る県下のワーストワンを記録する最悪の事態となりました。

私たちも今、この地域で、こんなにも多くの人たちが一瞬のうちに亡くなり、傷ついている現状を真剣に考え、対策を考えなければならぬといえます。

私たちの生活を豊かに、より便利にする目的で造り出された自動車は、この十数年の間に目ざましに進歩と普及をとげ、社会の仕組みを大きく変えてきました。生活のための物資や、情報の流通の範囲がより広く、より早くなり、さらに地域格差のない人間ども、反面、そうした快適な生活を支

うしの交流や、行動範囲の広い快適な文化生活も営めるようになりました。

万数千人の犠牲者となつて表われていることを忘れてはなりません。そうなれば、もう油断とか、不注意といった言葉で片付けられない社会悪としての要素しかないのです。

この世の中から交通事故がなくなければ、毎日の暮らしがどんなに明るくなることでしょう。同じ地域に住む同じ仲間が、お互いに傷つけ合う姿は、交通戦争と呼ばずして何でありえましょうか。

人の命より車が大切なものであるのか、交通遺族や障害者の手記を読むとき、「命を返せ」「体を元通り」と叫ぶ声が聞えてきます。交通事故はもうこりごり。なんとしてもなくすために今一度、どうしても交通事故の原因や要素を、ひとりひとりが考えなければならぬ時といえるようです。

そのための文明の利器が、その目的に反して、人の命を脅かす走る凶器として、また環境汚染源として、近年大きな社会問題となつてきました。

特に、交通事故は、一瞬にして尊い人の命を奪い、傷つけるだけに、その快適さとはうらはら現代の大きな悩みといえます。

そして、それらひとつ一つの原因が、運転者や歩行者のちょっとした油断や、不注意であり、その積み重ねが日本全国で、毎年一

かう一時間足らずでした。が、この間の違反事がなんと六台もあり、驚かされました。

取材したのは、午後一時から、道路は、同町でも四号線に次いで交通量も多く、さらに通学路もあって、危険性の高い道路として重点的に取り締りが行われている場所です。

六台の違反車

この道路は、同町でも四号線に次いで交通量も多く、さらに通学路もあって、危険性の高い道路として重点的に取り締りが行われている場所です。

私は、過日通称「ねずみとり」といわれているスピード違反の取り締りの現場を加茂署の協力をえて取材しました。

## ある日の交通取締り

取材したのは、午後一時から、道路は、同町でも四号線に次いで交通量も多く、さらに通学路もあって、危険性の高い道路として重点的に取り締りが行われている場所です。

六台の違反車

この道路は、同町でも四号線に次いで交通量も多く、さらに通学路もあって、危険性の高い道路として重点的に取り締りが行われている場所です。

私は、過日通称「ねずみとり」といわれているスピード違反の取り締りの現場を加茂署の協力をえて取材しました。

### 反省みえない

#### 運転者

そして、反則切符を切られた運転者のほとんどが、「運が悪かった」とか「後

## 無理や判断の甘さが原因 事故は減つても死者は大幅に増加

昨年一年間の事故状況は、県下でも加茂署管内でも、発生件数、傷者は前年に比べ減っているものの、死者が異常に増えた点に大きな問題点があるようです。

とくに加茂署管内の状況から、特徴的な傾向として目だったのは一件について、多数の死者がでる事故が多発したことです。

運転者による事故ばかりでなく歩行者、自転車乗りによる死亡事故も相変わらず発生しています。

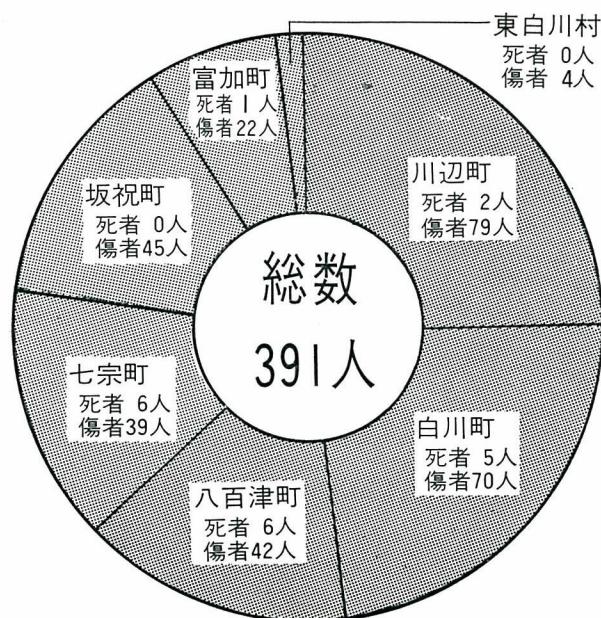
交通事故による傷者は、昭和四十年をピークにして毎年減少の傾向を示しています。今では、運転者はもちろん、世の中のお年よりから子どもたちまで交通ルールからマナーまで理解され、それを守ることはあたり前のことになっています。

しかし、反面では自分勝手な判断や無理から、大きな危険性をまき散らしながら運転をしている人も多くあり、それらが連日のように新聞やテレビで報道される悲惨な事故を引き起こしている現状にどう対処すればよいでしょうか。

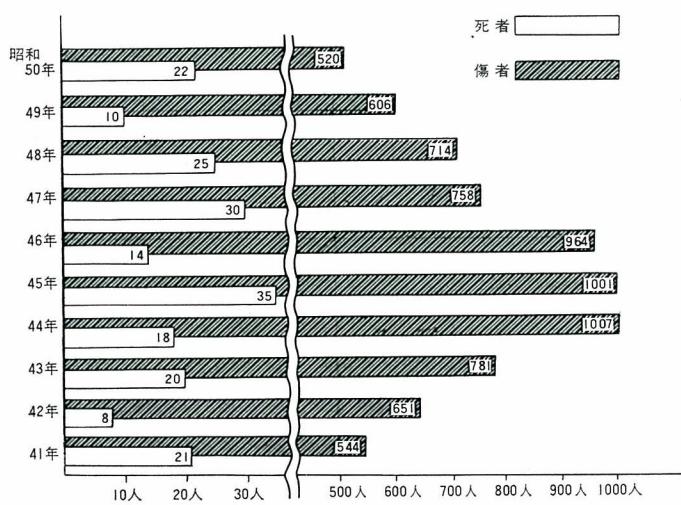
がうかがえます。安全施設、規制、取り締りの強化、安全教育の徹底など浸透してきた効果の表われとみてよいでしょう。

死者についてみますと、過去十一年間の平均は二十人、昭和四十五年の三十五人を最高に、死者の増えた年の翌年は重点的な対策がとられ、前年の半分以下に減少しています。

昭和50年中における加茂郡内の町村別の交通事故による死傷者数



加茂署管内における10年間の死傷者数



また、一般的に魔の国道といわれる四一号線で九件、十三人の死亡事故が集中したのも、大きな特徴といえます。

これを原因別みると、居眠り運転が四件で八人、酒酔い運転が三件で五人など、いぜんとして常識では考えられないようなものがトップを占めています。

そのほか、無謀とも思われるスピードの出し過ぎ、無理な追越しや踏切での安全不確認など、速度とルールを守っていれば防げたものばかりでした。

居眠りでも酒酔いでも、人間に

「続車に追いかけられた」といった弁解ばかりで、自分がどういった運転をしていたのか、どういった危険性のある運転をしていたのかという反省の色の見られなかつたのも共通しているようです。

いくら警察官が取り締りをして、道路環境の整備を行っても、このようないとりひとりのマナーの悪さや、自覚のなさでは、どうしようもないといえることを痛感しました。

# 事故のない明るい地域へ

## 望まれる家庭での安全教育

交通事故は、天災とちがつて原因があつて起つるもので。

確かな交通ルールの遵守で、九四割までが防ぐことができるといわれています。死者の異常に増加した昨年の原因をふり返り、「ではどうすればよいのか」いろいろ考え方検討してみましたが、特効薬はありません。

ひとりひとりの安全意識の積み重ねにより、今年こそは事故のない明るい地域にしたいものです。

運転する人、歩く人もともに正しい交通マナーを身につけること

### 分ついても守られない交通ルール

「スピードの出し過ぎはあぶない。飲酒運転は危険。飛び出しあけられないと、交通ルールは守らなければならぬ。」

県警では、今年こそ事故ない明るい郷土とするために「五つのお願い」として次のことを掲げ、みなさんへの着実な励行をのぞんでいます。

▽スピード違反を絶対にしない  
▽過労運転（いねむり）をしない  
▽飲酒運転は絶対にしない  
▽むりな追越しをしない  
▽幼児から目と手を離さない

この五つの項目は目新しいものではありませんが、しかし、昨年までは、この大きな事故のほとんどが、このうちのどれかが欠けたことに原因しています。

### スピードは控えめに

試みに、国道四号線を走る車で、交通ラッシュでもない限り制限速度を完全に守って走る車は、まれにしか見当りません。

たとえ六十キロは超えないにしても、五十キロ、四十キロの制限速度は、ついにオーバーしてしまいます。このようないい處がかけられています。

このような実情から、今年の事故ぼく滅の悲願がかけられているといえます。

### わが家の標式

わかってる、よっぱらい  
運転はぜったいしないよ。



これらはドライバーとしての資格がないばかりか、人としてもどこかに欠陥のある事故誘発型といつよいでしょう。もちろん発見されれば点数をどっさり取られ、時によつては現行犯で逮捕されます。

### 飲酒運転は絶対にだめ

飲んだら運転しないという模範型から、さめればよいだらうといふ人、飲んだ勢いで突っ走る横暴型まで、人それぞれの性質はあります。まだまだ飲酒運転はあとを断つていよいよです。

飲酒運転の結果

は、恐ろしい交通事故につながり、重い刑罰が科せられるほか、家庭、社会へさまざまの黒い波紋が広がり、運転者は一生苦しむなければなりません。酒を飲んだら感覚、判断力が鈍ることとは、運転免許証を持つている人であれば誰でも承知しているはずです。飲んだら乗るな、こんな簡単なことがなぜ守られないものではありません。子どものみの飛び出し事故も正しい交通マナーは必要です。本来人が利用する道は、今や車で占領されています。歩行者は自己防衛する外はありません。とくにお年寄り、幼児は誰かが守つてやらなければなりません。そこには家庭における安全教育の徹底が叫ばれているのです。

その責任の大半が母親にあると言はれていました。

もはや、これ以上の犠牲者を出さないため、警察の取り締り、安全施設の強化も大切ですが、地域や家庭での交通安全対策において外はないところまでけています。

そのためにも、毎日の生活の中において、私たちは模範となる行動を必ず示すことにあるといえます。

このように、スピードと飲酒だけでも忠実に法規に従うには、強い意志と自制心が要求されます。

車の性能を試すごとく無謀に走る車もあります。

車を運転する人なら、守らなければならることは十分わかっています。

命までも奪つてしまふものです。車を運転する人なら、守らなければならぬことは十分わかっています。

あなたの人格は、ハンドルを握った時にこそ本来の姿であるとの意識の上に立つて、毎日の運転により正しいマナーを打ち立てます。

運転者側だけでなく、歩行者にも正しい交通マナーは必要です。

本来人が利用する道は、今や車で占領されています。歩行者は自己防衛する外はありません。とくにお年寄り、幼児は誰かが守つてやらなければなりません。そこには家庭における安全教育の徹底が叫ばれているのです。

その責任の大半が母親にあると言はれていました。

もはや、これ以上の犠牲者を出さないため、警察の取り締り、安全施設の強化も大切ですが、地域や家庭での交通安全対策において外はないところまでけています。

そのためにも、毎日の生活の中において、私たちは模範となる行動を必ず示すことにあるといえます。



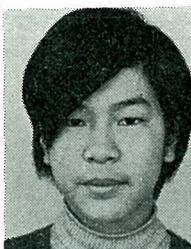
## ミニ信号機で 正しい交通指導

七宗町

現代社会の最大の悩みともいえる交通事故は、幹線道路から生活道路へと、その範囲は広がるばかりであります。

町の南を東西に走る国道四一号線では、事故が多発して多くの犠牲者を出しています。とくに最近は、県道町道でも事故が多発し、老人や幼児などの歩行者がいつまきぞえになるかわかりません。

こうした交通事故に対処するため、小学校では、登下校時に比較



八百津小学校  
6年 岩井真弓さん

交通についてのきまりはたくさんあります。その中でも特にみんなと関係の深い手信号はしっかり守られてるか、調べてみました。このごろは手信号をやつていくんは、ぜんぜん見かけないので、やっていく人はいるだろうか。五十人も調べるのだから、一人ぐらいはいるだろうと思い

## 自転車の手信号ゼロ

ったのです。私は、交通のきまりを守ろうとあんなにマスクなどで呼びかけているのに、実はみんなは規則など守っていませんだと思いました。かざりだけの規則ではないのに。

守られていない交通規則

**通規則** ます。しかし、免許をもらえばやらなくなってしまうということは問題だなとこの調査を通じて感じました。

交通規則はまだたくさんあるので、しっかりと守り、事故のない日本にしたいと思います。

これは、昭和二十年以降三十年間に、村の中や村の外で交通事故によって亡くなられた村出身者二十人の靈を慰めたものです。さらに、この機会を通じて、のどかで平和であるはずの山村でさえ、これだけの犠牲者がある現状を再認識し、再び悲惨な事故を繰り返すまいと、こそってその誓い

## 機契祭靈慰に

東白川村

村では、さる一月八日に交通安  
全協会東白川支部が中心となつて  
「交通事故物故者合同慰靈祭」を  
歎の行いました。

これは、昭和二十年以降三十年間に、村の中や村の外で交通事故によって亡くなられた村出身者二十人の靈を慰めたものです。

さらに、この機会を通じて、のどかで平和であるはずの山村でさえ、これだけの犠牲者がある現状を再認識し、再び悲惨な事故を繰り返すまいと、こそってその誓い

## 交通安全を再認識

# 慰靈祭契機に

■ 郡広域版第三号をお届けします。日ごろテレビや新聞でもしないにニュースで、なってきています。

■どちらかというとマンネリ化してしまっているこの問題をあえて取り上げたのは、今一度、現に被害者として加害者として苦しんでいる人が多くあり、そして毎日そうした人ができていることを確認しようとしたからです。



このグループづくりを今後町全  
域に広めていき、酒を飲んで運転  
する必要のないような環境をつくる  
りあげ、問題の多い飲酒運転の完  
全追放を図っていきたいと願って  
います。

慰めました。

また、遺児を代表して、十一年前一家の大黒柱であるお父さんを亡くした安江八千代さん（東白川中三年）が、幼き当時の悲しい思い出や苦労、そして今後こうした自分たちのような境遇の人たちができないよう涙ながらに訴えました。

的に交通量の少ない道路を通り、交通事故防止の自衛手段をとつて

## ケルーフつくりで 飲酒運転の防止を

白川町

ら飲酒運転をしないグループが誕生し、活動を続けています。

隣り近所の気の合った者どうしが数人がグループを作り、誰かが酒の席へ出たとき、同じグループの他の人が送り迎えをするという方法です。

慰めました。

を新たにしました。慰靈祭は村民センターで行われました。まことに、遺族や遺児、その他村内外の関係者ら約百人が集まり、それぞれの立場から物故者の靈を慰めました。

また、遺児を代表して、十一年前一家の大黒注であるお父さんを